

シカと植生の関係

○ニホンジカの生態

ニホンジカは、日本や中国東部に分布する偶蹄目シカ科シカ属の動物である。日本に生息するニホンジカは、エゾジカ、ホンシュウジカ、キュウシュウジカ、マゲシカ、ヤクシカ、ケラマジカ、ツシマジカの7つの亜種に分類され、概して北方に生息する亜種ほど体が大きい。大台ヶ原に生息している亜種はホンシュウジカであり、体重60kg程度の中型のシカである。ニホンジカは、オスだけが角を持ち、角は毎年生えかわる。普段は、群れをつくる生活し、交尾期以外の時期には、母子からなる母系集団と、オスが集まって出来る集団に分かれている。交尾期は、秋期を中心とする約1ヶ月で、その期間は、強いオスがなわばりをつくり、1頭のオスと数頭のメスからなる交尾集団を形成する。メスの妊娠期間は約8ヶ月で、次の年の5月下旬～7月上旬に1頭の仔を産む。

大台ヶ原では、ミヤコザサを主食としていると考えられ、ミヤコザサの多い東大台を中心に生息している。季節によって生息場所に違いがみられ、平成17（2005）年、平成18（2006）年の調査では、春には西大台に多く、ミヤコザサの現存量と栄養価が最大となる夏には東大台に多いことが分かっている。なわばりを形成する秋には、互いの集団が接近することを避け、大台ヶ原全域に散らばって生息している。また、GPSによる平成17（2005）年以降の調査により、冬には三重県側の標高の低い地域に移動する個体がいることも明らかになっている。